

「ベルゼブル論争」という小標題が掲げられます。1節の冒頭には「そのとき」と書き出されます。文脈からいえば、これは安息日なのですが、ここではすでに安息日論争は終わって、小標題にあるような新しい別の論争が始まってゆくのです。

本日の箇所は14-15節でイエスの殺害計画を立てるファリサイ派とイエスの病人への癒しを認める群衆とがより対比的に描き出されます。群衆はイエスを「ダビデの子」、つまりメシアとして迎え入れますが、ファリサイ派は癒し的事实に反して悪意に満ちた対応をとります。この箇所は9:32-34の再現です。9章では「口の利けない人」ですが、ここではさらに「目の見えない人」でもあるのです。そして、彼が「ものが言え、目が見えるようになった」と記されるのも群衆の心の目が開かれたことを意味します。それに対してファリサイ派は事実を正しく見ることが出来ない者たちであると批判が述べられてゆきます。

奇跡をきっかけに論争が始まる記事は福音書記者がおしなべて良く用いる方法ですが、マタイが参考にしたマルコ3:20-30では、イエスが「気が変になっている」という噂が基となりますが、マタイは「驚き」(23)という言葉に置き換えています。おそらくマタイは「気が変に」という表現より、イエスの行為を「驚き」の対象として捉えた方が好ましいと考えたのでしょう。

この驚きの行為に対してファリサイ派はベルゼブルの力によってであると非難します。これに対してマタイは二つの点で反撃します。一つは、内部分裂は必然的に自滅せざるを得ないということ(25-26)。二つめは、ユダヤ教でも悪霊追放が行われていること(27)です。イエスに対する批判は、そのまま彼らがベルゼブルの力を仰いでいることになるということです。しかし、この論理で行く

とイエスもユダヤ教も神の力を使っているという点で等しくなってしまう
す。

その矛盾が28節の「神の国はあなたたちのところに来ているのだ」という言葉で説明されます。つまり、マタイによれば神の霊とは「受容性」と「排他性」によって決定づけられるということです。ファリサイ派が弱く・小さく・貧しい者たちを罪人として受け入れないばかりかイエスの敵対者であるにもかかわらず、イエスは彼らに「あなたたちのところに」という言葉を以て受け入れる準備があることを示します。それも「近づいた」(4;17)ではなく、「来ているのだ」(28)という、よりはっきりした招きの現在性を語るのです。イエスの行為を否定し、救いを拒否する者の上にも確かに来ていると受容するのです。

良心とは何かと考えます。誰もが持つ良いか悪いかを自分に問う心の動きでしょう。しかし、自分で自分を問い、判定すること自体がそもそも傲慢ではないでしょうか。良心的な人と呼ばれる方に保守的な人が多いのもこの点でしょう。良心とは罪から人を守ってくれるもののようで、実は罪の極限になりかねないものなのです。良心が本当に自分を問うものなら、自分で問うことは止めて、他からの問いかけに自分自身を委ねることから始めるべきではないでしょうか。ファリサイ派も自他共に認める良心的な人々だったといいます。それゆえ排他性を拭えませんでした。イエスの福音とはそんな自分の受け入れ直しなのです。